

◆授業に関するアンケート◆ 「2020 年度春学期 授業に関するアンケート総評」

教育開発支援センター長 若本夏美

From Passive to Active Course Evaluation

はじめに

こんにちは。教育開発支援センター長の若本夏美です。

2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響で未曾有の状況下で春学期の授業が進められました。概して、大変な状況にある時には人はなかなかその位置づけが理解できないことが多いのですが、新型コロナウイルス感染症に限っては各教職員とも異常な事態にあることを認識しながら、ひょっとしたら春学期の授業は成立しないのでは無いか、という緊張感を持った授業運営であったことと思います。今回の事態が「第2次世界大戦に匹敵」するような世界規模の大惨事であると評されることがある所以です。本学は幸いにも秋学期から対面授業を主とした授業運営がなされていますが、関東の大学では 100%遠隔授業というケースも多く、関西の大規模大学でも対面授業の比率は未だ少ないようです。実際、この原稿を書いている段階で（2020 年 12 月）まだ収束先が見えない状態です。

全面遠隔授業という誰もが経験したことのない春学期について、授業アンケート自体する意義を疑う声もありましたが、このような状況だからこそこの授業アンケートをするべきだという多くの声（教育開発支援センター運営委員会）に押される形で 2019 年度からの実施形態である manaba（以下、本学愛称、マナビー）上で 2020 年度春学期授業に関するアンケートが実施されました。新型コロナウイルス感染症が収束していない状況下で総括をすることは時期尚早であることは認識しながらも、春学期授業アンケートの特徴を探っていきたいと考えております。

ところで、そもそもこの授業アンケートは何のために行っているのでしょうか？授業に関するアンケートは 2019 年度、大きな変革の時を迎えました。教育開発支援センターでは、これまで長年続けてきた紙ベースのアンケートから本学で導入している LMS（Learning Management System）であるマナビーによる授業アンケートに切り替え、併せて、「授業振り返りシート」を導入し（2020 年度秋学期より Web による回答方式へ）、両者を一体化させながら授業の改善、特にアクティブ・ラーニングを推進しています。この変革の目的は、(1) アンケート実施の簡便化（教員・学生）、(2) アンケート実施の柔軟性（学生；アンケートは教室内だけで実施する必要はなく、欠席した学生もまた実施期間であればアンケートに参加可能）、(3) フィードバックの迅速化（教員）、(4) 自由記述の復活、そして (5) 必要経費の削減、といった 5 点にありました。一方で、何事にも「諸刃の剣」現象はあるもので、まだ本学では全教室に Wi-fi が整備されていない状況下では（新型コロナウイルス感染症の対策でかなり 70%未満まで改善）スムーズな授業アンケート実施が出来ているとは言えな

い状況です。それ以上に深刻な問題は実施率が上がるどころか「下がってしまった」という点にあります。

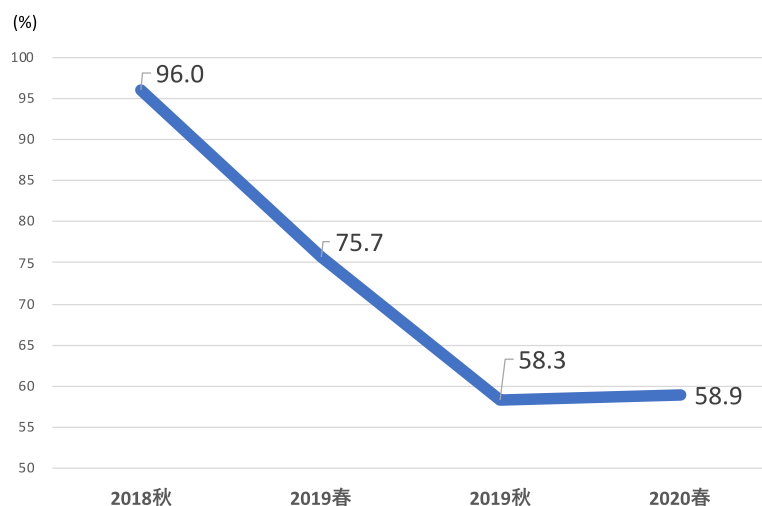


図 1. 授業アンケート実施率（過去 2 年間：全体）

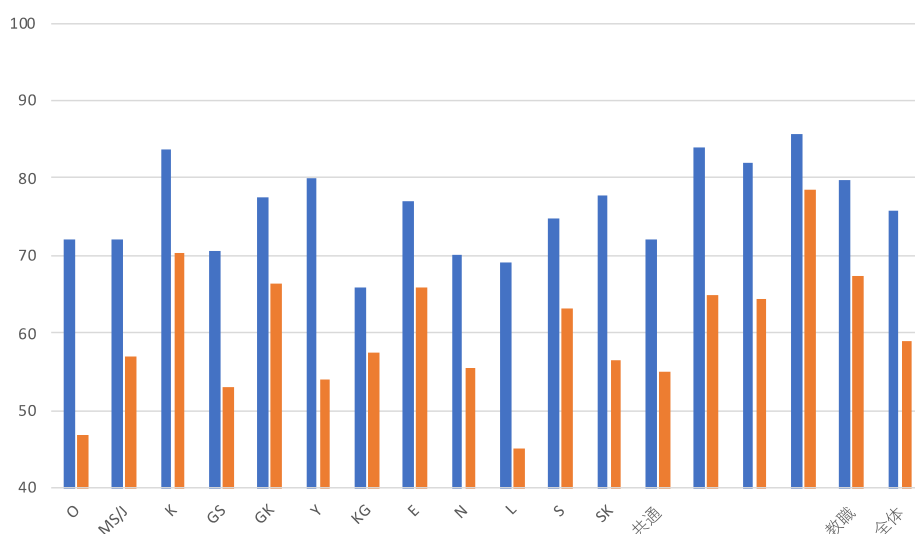


図 2. 授業アンケート実施率（2019 年春と 2020 春の比較：各学科）

学科による多少の相違はありますが、80%を超えた学科・科目区分は存在しません。これは今回のアンケートの最も肝心な部分だと思います。特に 2019 年秋学期の大幅な落ち込み（75.7%→58.3%）を受けて教育開発支援センター運営委員会でも対策を議論した上でこの数字（58.9%）ですので、各学科の教務主任や教育開発支援センター運営委員の先生方の声かけがなければこの実施率は更に下がってしまっていた可能性すらあります。2019 年度春学期の総評で私は、「便利になったことによって、単に教員が授業アンケート実施を失

念してしまった。紙ベースの授業アンケートであれば、実施していなければ現物が目の前に残ってしまうので、アンケート自体が自然なリマINDERになるが、デジタルの場合には目に見えるものは何もないのでアンケートを実施の実施を忘れてしまう」（授業に関するアンケート、2019年度春学期 授業に関するアンケート総評）と分析しました。理由はこのようなものであっても「教員が気をつける」程度の対策ではもう埒があかないように思います。

根本的には教員・学生にとって「授業アンケート」が必要とされていないという可能性があります。大学もまた認証評価に向けて行っているだけで「本気で」授業アンケート（授業振り返りシートも）をテコに高度で質の高い授業を創り出そうとする意欲に欠けているのかもしれませんが、その最大の責任はこの教育開発支援センターにあることは言うまでもありませんが、このセンターに対する大学のリソースの配分（人的・財政的）が影響している事も事実です。

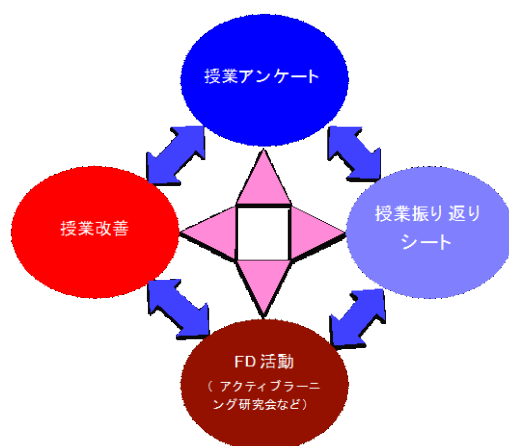


図 3. 授業改善のイメージ

上図に示したとおり、本学ではFD活動を活発に行いながら授業改善の取り組みを長年にわたり行ってきました。しかしながら、この授業アンケートの低実施率を見る限り、英語で言うところの“thinking outside the box”といった「発想を変えた」取り組みを今後、検討しなければならないのではないかと危機感を持っています。じゃあ、その取り組みは？という現時点では、図3の中央に位置する△を組み合わせたとしたファシリテーターの「ようなもの」という漠然としたイメージしかありません。形だけ進めれば良いというのであれば、今のままで、小学校の「忘れ物点検」のようなものを追加する対策になってしまうのではないかと心配することになってしまいうでしょう。本年度の新型コロナウイルス感染症のような危機に直面した時期であるからこそ、「何のための授業アンケート」で「どうその結果を活かすか」といった根源的な問いに立ち戻った議論を始めなければならないではないかと思ひます。

さて、本年度の結果について、これまで蓄積してきた授業アンケートとも比較しながら

ら、以下、概観してみたいと思います。この総評は、既に教務部で分析された「報告書」をもとに総括することを意図しています。

2020 年度春学期の授業アンケートについて、前回（2019 年度秋学期）よりの変更点は以下 2 点です。

- ① Q17 に「遠隔授業は滞りなく行われましたか？」の項目追加
- ② 実施期間を 1 週間短縮した（これは教員の指示を待たずに学生がアンケートに既に答えてしまうという現象を防止するため）。

Q15. DWCLA10

「DWCLA10 の内、この授業の履修を通してその獲得や向上に役立ったと感じられるものをすべて選んでください」

今回最も注目すべき項目である DWCLA 10 に遠隔授業がどのような影響を与えていたか、という議論から始めたいと思います。

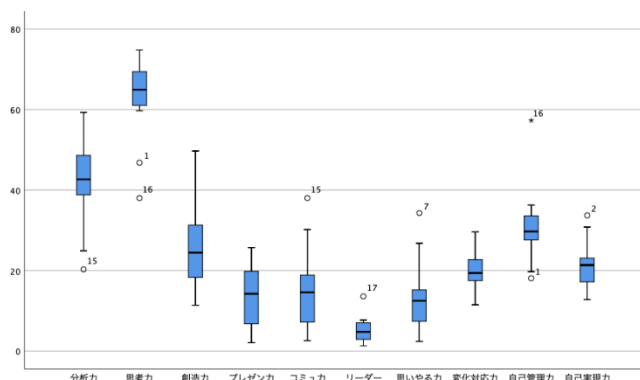


図 4. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10, 2020 春)

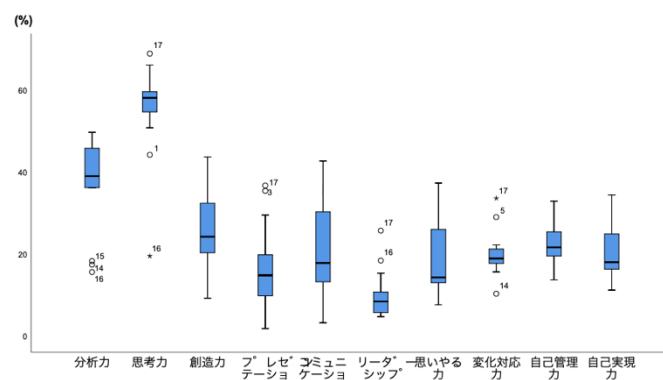


図 5. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10, 2019 春)

2019 年度春学期と比較すると (図 4, 5) 興味深い結果に気づくことができます。

① 2019 年 (対面授業) に対して 2020 年 (遠隔授業) が上回った項目

- 思考力
- 変化対応力
- 自己管理能力

② 2019 年 (対面授業) に対して 2020 年 (遠隔授業) が下回った項目

- コミュニケーション力
- プレゼンテーション力
- リーダーシップ
- 思いやる力

③ 2019 年 (対面授業) と比較して 2020 年 (遠隔授業) の方が個人差が拡大したもの

- 分析力

④ 2019 年 (対面授業) と比較して 2020 年 (遠隔授業) の方が個人差が縮小したもの

- 自己実現力

遠隔授業は双方向オンライン型授業であれオンデマンド（動画配信）型授業であれ（詳細は「遠隔授業に関するアンケート集計結果」を参照）、個別学習が必然的に増加することになります。Zoomのブレイクアウトルームを利用したとしても、アイコンタクトが取れない、ノンバーバルコミュニケーションがしづらいなど対面でのグループ活動とは大きく様相が異なります。当然、コミュニケーション力やプレゼンテーション力の低下は仕方ないことでしょう。しかし、それ以上に興味深いのは思考力の向上と分析力の個人差拡大です。教員が薄々感じていたことですが「知識型」つまり知識を吸収したり英語のスキルを向上させるのには遠隔授業の方が集中していいのかも知れません。今後更に研究が必要ですが、ゴールの決まっている学習においては個人学習をベースとする方が効率がよい可能性があります。対面授業が遠隔授業に対して100%優れているのではなく「まだら模様」になっているようです。

DWCLA10の中で最も選択率の高かった項目という点では、1位)思考力（[2019年度春学期、以下同様]56.1%→64.2%）、2位)分析力（37.3%→41.4%）、3位)自己管理能力（22.0%→30.1%）、逆に低かった項目は、10位)リーダーシップ（8.6%→5.2%）、9位)プレゼンテーション力（15.1%→13.9%）、3位)思いやる力（16.0%→12.4%）でした。

大学教育で最も重要になるのが卒業研究（論文）における「課題設定」です。その意味では授業の中から各自で「問題を発見する能力」は育成すべき重要な項目であろうと考えられます。問題を教員が設定しているだけでは、リーダーシップも自己管理能力も自己実現力も身につけません。何度かこの総評で提唱しているのですが、学内から何も反応がないというのは、私の提案が間違っているのか、この総評を誰も読んでいないのか、そのどちらかなのでしょうか。

では、次に授業アンケートの各項目の結果にうつります。まず、遠隔授業の中で実施した授業アンケート結果の特筆すべき項目としてQ15→17→5の順に進めます。その後、Q2以降は質問項目順により重要な項目に焦点を当てて分析したいと思います。また、この総評では大学全体の傾向を議論することを主目的とし、従来の学科・科目区分別の結果分析については各学科で御議論いただく方がよいと考え、今回は省略します。

Q17. 遠隔授業

「遠隔での授業は滞りなく行われましたか?」

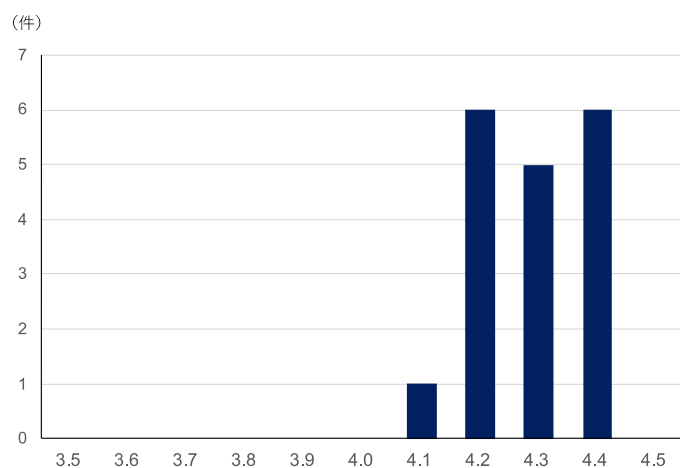


図 6. 遠隔授業実施 (Q17)

この項目が、今回の授業アンケートで二番目に注目すべき項目であったと思われます。幸いにして、諸先生のご尽力により、遠隔授業はスムーズに進行したと学生諸姉からは評価されているようです。尺度は1～5の間隔尺度を利用していますので分岐点は「3.0」となります。全17学科・科目区分において平均が4.0以上の高い評価を得ています。

Q5. フィードバック

「提出物に対するフィードバック(採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など)は効果的に行われていましたか」

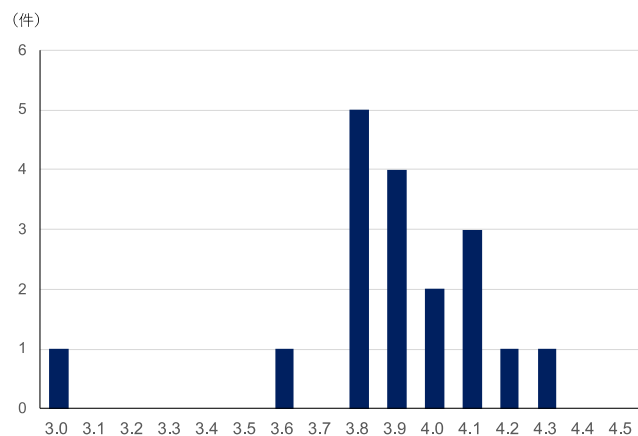


図 7. フィードバック (Q5)

この項目においてはやや学科・科目区分で相違が大きくなってしまっています。同じ区分の平均値が 4.0 (2019 年度春学期) → 3.9 (2020 年度春学期) と微減という状況ですが、図 7 からは問題を感じざるを得ません。フィードバックは、アクティブ・ラーニングの中核をなす重要な要素です。一方、遠隔授業では学生に課題を課することが多くありますが、教員にとっては「ブーメラン現象」のように課した課題がそのままフィードバックとして戻ってきます。マナビー(LMS)を活用することにより、「課題の提出⇔フィードバック」が効率的にできると思われますが、今後も遠隔授業を取り入れた授業運営が求められることになります。同志社女子大学としてはこの点については最重点項目として「改善につとめてゆく」必要があると思います。

Q2. 受講生の理解度

「受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか」

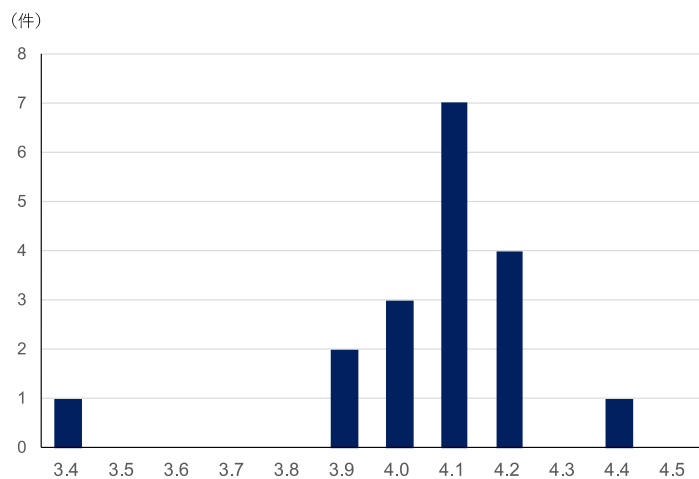


図 8. 理解度 (Q2)

この項目においてもやや学科・科目区分で相違が大きくなってしまっています。同じ区分の平均値が 4.3 (2019 年度春学期) → 4.1 (2020 年度春学期) と微減という状況です。

「受講生の理解度を確かめながら授業が進める」ことは特に遠隔授業では難しい側面があると思います。今後は対面授業だけでなく遠隔授業においても理解度を高める工夫やその学内交流が必要となってくると思います。

Q4. 授業の双方向性

「教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生または受講生同士の双方向性に工夫がされていたか。」

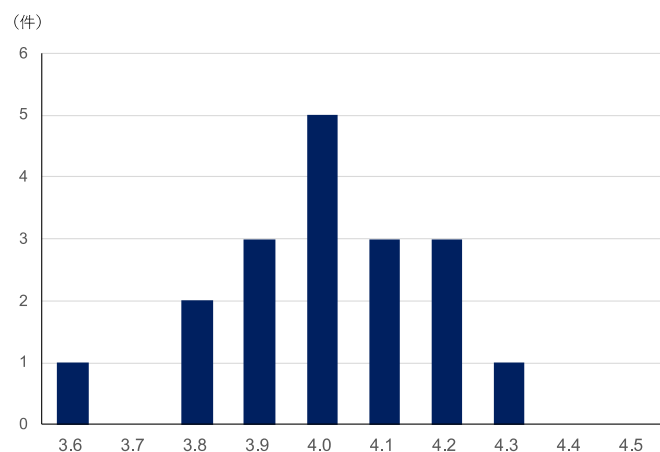


図 9. 双方向性 (Q4)

この項目においては正規分布の様相を示しており、やや学科・科目区分で相違が大きくなっています。同じ区分の平均値が 4.2 (2019 年度春学期) → 4.0 (2020 年度春学期) と微減という状況です。特にオンデマンド (動画配信) 型の遠隔授業においては双方向性を確保することが困難であったと思われます。

Q7. 自主学習

「自主学習を促す工夫がなされていましたか。」

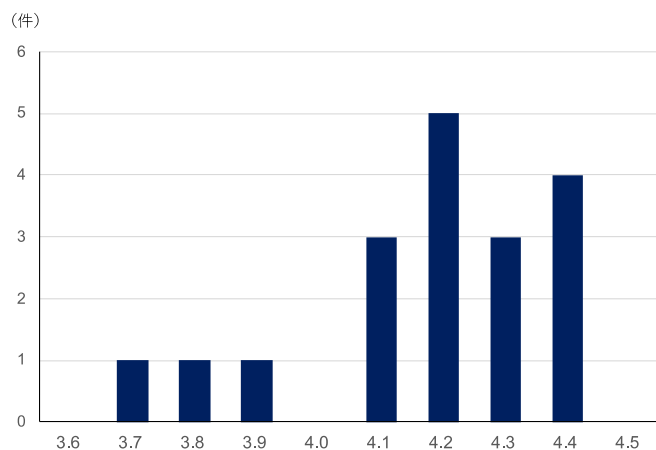


図 10. 双方向性 (Q7)

この項目においても学科・科目区分で相違が大きくなってしまっています。同じ区分の平均値が 4.0 (2019 年度春学期) → 4.2 (2020 年度春学期) と微増しています。同志社女子大学としては自主学習については最重点項目として「継続的に取り組む」必要がありますが、遠隔授業の方が自主学習が容易になるのかもしれませんが。学科科目群の特徴も合わせ今後検討を進めるが必要になると思います。

Q9. 自主学習

「この授業について、授業時間、予習、復習、自主学習すべて含めて1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。」

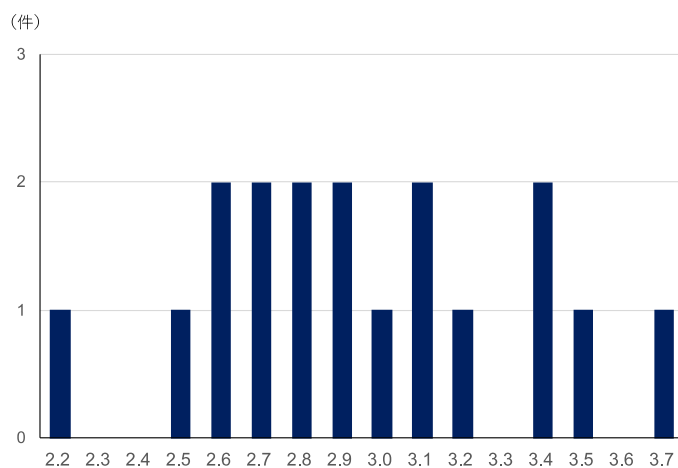


図 11. 授業外学習時間 (Q9)

同じ区分の平均値が 1.9 (2019 年度春学期) → 3.0 (2020 年度春学期) と大幅に増加しています。一方、実際の学習時間に関しては各学科間で大きな相違が見られました。DWCLA10 において「思考力」の大幅増がありましたが、この学習時間増が貢献しているのかもしれない。

Q14. 到達目標達成

「あなたは到達目標を達成できたと思いますか。」

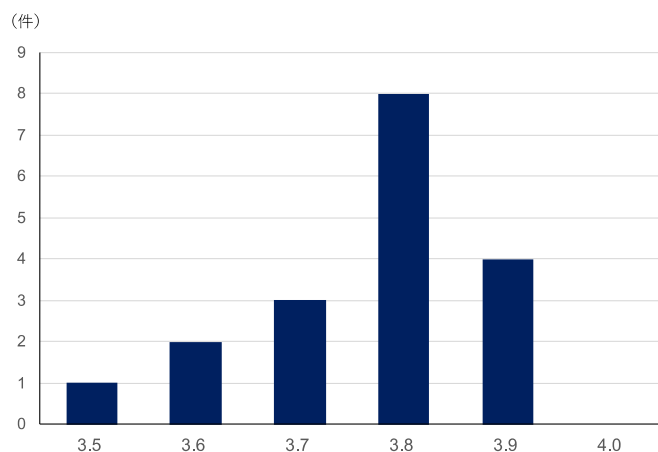


図 12. 到達目標達成 (Q14)

同じ区分の平均値が 3.8 (2019 年度春学期) → 3.8 (2020 年度春学期) と変わりません。また前年度と比較すると各学科・科目群の相違が少なくなっているのも特徴です。遠隔授業においてシラバスに記載の初期目標が例年どおり達成できたと考えていいのかも知れません。

まとめ

34, 287 名（2019 年度春学期は 44, 292 名）という膨大な数字が示す通り、いまや巨大プロジェクトとなった観すらする授業アンケート。結果分析を見られてどのような感想を持たれたでしょうか？ここからは新型コロナウイルス感染症の影響があったにも関わらず、教職員・学生諸姉が英知を絞り、協力しながら、全体としては春学期、例年に匹敵する高度な授業が展開されてきた姿が浮かびあがってくるのではないのでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の影響は甚大です。2021 年も遠隔授業に切り替えなければならないという不安を抱えながら授業準備をしなければならないかもしれません。しかしながら、この授業アンケート結果が示す通り、遠隔授業が対面授業に対して全ての面で劣っている訳ではなく、むしろ今後、感染症が落ち着き平常に戻った場合においても、この遠隔授業の利点を対面授業に活かす形で「2020 年代の同志社女子大学の授業」を構想することが可能となるのではないのでしょうか。

先日、英語英文学科 1 年次科目 Career Introduction I のゲストスピーカーとして小倉由紀氏（サントリー株式会社）にご講演いただきました（オンデマンド型）。その際、ウイスキーの味を保つ秘訣を長年ブレンダーを務められた興水精一さんの話として教えていただきました：「ひとつのブランドのウイスキーの味を維持することは難しい。維持するためには、ブランド名は同じでも中身は少しずつ味を良くしていかなないとお客さんは同じだとは思ってもらえない」と。これは私達、同志社女子大学の教育においても同じ事がいえるのではないのでしょうか。あと数年で創立 150 周年を迎える本学。その伝統を守るためにも「少しずつ」その教育内容を刷新し「良い内容」にしてゆく必要があるのだと思います。その秘密はひょっとすると全員が図らずも 2020 年春学期に取り組む事となった「遠隔授業」の中にあるのかもしれません。

今後とも、教育開発支援センターへの変わらぬご支援・ご協力をお願いして、今回の総評を終わりたいと思います。最後まで読み進めていただき、ありがとうございました。

(総評メモ)

各学科へのコメントは学科間の差が大きすぎるため今回は見送りました。また、以下の項目は、重要度が低いと判断し分析対象から外しました。

- Q1. シラバスとの合致
- Q2. 受講生の理解度
- Q3. 授業レベル
- Q6. 理解を促進する工夫
- Q10. 積極性
- Q11. 授業や関連分野への意欲
- Q13. 到達目標達成への指導

<凡例>

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学科科目
MS/J	メディア創造学科/情報メディア学科科目
K	国際教養学科科目
GS	社会システム学科科目
GK	現代こども学科科目
Y	医療薬学科科目
KG	看護学科科目
E	英語英文学科科目
N	日本語日本文学科科目
L	人間生活学科科目
S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
SK	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
共通	共通学芸科目
キ・同	キリスト教・同志社関係科目
外国	外国語科目
スポ・健	スポーツ・健康科目
教職	教職科目